白道のカミーノ便り

キューバ①

シンポ参加あきらめたが…

２０１０年の春、トルコからの便りを待っていた。カッパドキア近くの焼き物の町、アバノスでの国際陶芸シンポジウムの開催を心待ちにしていたのである。07年に招待を受けたときには、治安状況が悪く断念した。2年後のシンポジウムは資金難で開催そのものが見送りとなった。

十数年前に滞在したイスタンブールの変わりようも見てみたかったが便りはなく、代わりにキューバから招待状が届いた。

キューバでの国際陶芸シンポジウムには、それほど興味が湧かなかった。妻のベアトリーチェと06年に参加したが、苦い記憶ばかりが残っている。それまでのシンポジウムは、ホテルも食事も一切を国や自治体から助成を受けた主催者側が負担し、招待者は航空券だけの負担でよかった。それがすべて参加者負担に変わっていた。参加料まで追加されている。

欧米の陶芸家は、大学や美術学校の先生として生活の基盤を持っている。日本と違って焼き物を売って生活している陶芸家はほとんどいない。ベアトリーチェもリトアニアでは美術学校の講師をしていた。

国際シンポジウムは重要な仕事で、経費を大学が出す。先生をしていない場合でも、文化交流のための助成制度が整っていて、自己資金で参加する人はほとんどいない。しかし私たちは、事業仕分けの渦中に国際交流基金の助成を却下された。航空券だけでも高額なのに現地での出費を考えるとキューバ行きは無理だろうと思った。

その状況がベアトリーチェの一言で一変した。（つづく）

工房の筆者＝ベアトリーチェさん撮影

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。